
美緒の日常

たっくー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美緒の日常

【Zコード】

Z6233C

【作者名】

たつぐー

【あらすじ】

オレの名前は倉持美緒。女の子みたいな名前だけれど昔は男だ。そんなオレとブラコンの姉、かつこいけどちょいホモっぽい友人達で織り成すドタバタコメディー。

プロローグ

ルルルルルルルルルル

カーテンの隙間から朝の光が顔を照らす。

「ん～～…」

ルルルルルルルルルル

わの わからうるわこ物に疎ましく思いながらもいつも通り手を伸ばす。

カチッ、と音が止む。

おはよう。オレの名前は倉持 美緒みお 女の子みたいな名だけれどつきとした男だ。私立鳳虎学園生徒数一千人のマンモス高に通つている高校一年である。そして、先ほどからの違和感というか奇妙な布団の中をチェック！！

「……」

そこには本来あつてはならないもの、こやくてはならない者が居たのだ。

「な、何でオレの布団の中にいんのー？棗姉ーー」

「ん～、みー君も少しだけ～」

「つーか早く起きりーー！してひざひざって入つてきたのー？」

「ふふつ、私にできないことはないわ」

「はあ～～～」

嫌でも溜息がでて来てしまひ。

(「」の姉はあ～)

また心の中で溜息。

そうだ紹介しよう。

この奇怪なことをしていた人は一つ上の実の姉である。

名前は倉持 粟同じ学園に通う高校三年である。学園一の美少女と言われるだけはあって容姿端麗、おまけに頭脳明晰、スポーツ万能、生徒会長も務めるという非のうちどころのない完璧超人なのだが、欠点というか問題が一つだけ……なんつーかブリーフケース? って言うの? それさえなければ尊敬できる血漫の姉なのが…。

「ねえみー君、今私のこと考えてなかつた?? ねえ、ねえーーー！」

嬉々として聞いてくる姉。(粟姉微妙に鋭い)

「あつ、みー君早く準備しないと遅刻しちゃうよーーー！」

「や、やばい……もうこんな時間がよーーー！」

(あ～、朝からほんと疲れぬ～)

プロローグ（後書き）

初めて書く小説です。またり更新で頑張りますので、感想・評価などしていただけると嬉しいです。

第一話 駅の図書（繪葉や）

やつぱり上手く書けないですね。それでも読んでもらえると嬉しいです。

第一話 朝の日常

いつも、オレ」と倉持美緒です。いやーあれから急いで準備したかいがあり今は姉とのんびり歩いて学園へと向かってる途中なわけです。それにしても。

「こつも思つナゼつぱつ姉人氣あるんだなあ~」

「ん? 何唐突に?」

「皆姉見てるんだなと思つてね」

「本当にかう思つてゐるの?」

「え? ひ、ひん」

「はあ~」

何か物凄い呆れた目でみられながら溜息つかれたんですけど。けどね姉が人気があると思つてしまふのは仕方ないんですよ。なんせさつきから同じ学園の生徒達がこいつを見ながら(特に女子が)目を輝かせて“可愛いー”とか、なぜか“萌~”とよく判らない言葉を言つてるんですから。

(ん~さすがに姉と一緒にはいるからもう慣れたけどね。でも何で毎回姉は体中から殺氣を飛ばしるんだ?? 今だに判らん)

- - 姉 Said e - -
ん~、みー君と一緒に居れて幸せだわ。もう少しゆっくり歩こうつか
しら? それにしてもやつぱりこつ見てもみー君は可愛いわね。まる

で“天使”だわ！…ぱちりとした目、小さこは鼻、そしてしゃぶりつきたくなる頬…おつといけないついつい口が滑ってしまったわ。まあそれくらい可愛じつてことよ。（でもこの周りの女子達は煩いわね。）

「こつも思ひけどやつぱり棗姉人氣あるんだなあ～」

「ん？何唐突に？」

「咲棗姉見てるから凄いと思つてね」

「本當にやつ思つてゐるの？」

「え？」「うそ」

「はあ～」

（まつたくこの子は）

鈍感にも程があるわね。そんなところも可愛いんだけど。まあだからこそ私はハイエナ共からみー君を守り、そして私がみー君をいただくわ！！

そんなこんなでいつも通り学園へと到着した。

第一話 朝の日常（後書き）

美緒＝み 粟＝な

み「どうもーー今回から次回予告や裏話等
を僕達がやっていきます」

な「ただのサボりじゃない」

み「まあまあ、
二人で頑張りうよ」

な「そうね、愛し

？？？「美緒は俺のだあーー」

み「はあー

な「面倒だからこの辺で今回は終わりましょう」

み「じゃまたー」

？？？「え、もうーへへそーー」

第一話 悪友！？登場の日常

どつも、美緒です。今は姉と別れ自分の教室の前に着いたところです。教室は先に昇校口で貼り出された組表で確認済みだ。因みに三組だった。

(知ってるやつ居ると良いくけどなぁ)

ガラツ

教室へと入り自分の席へと向かつ。

ダダダダダダッ！－

「どうい－－」

「？？」

ドスツ

いきなり背中から物凄い衝撃が襲つて來た。

「ぐげえつー？」

誰か知らんが全力疾走してきた勢いのまま背中に抱き着いたのだ。
(こんな事してくる奴はあいつしかいねえ)

「美～緒～」

「や、やめひ。ほお擦りなんかしてんじやねえよーー！」

「怒った美緒も可愛いなあ～」

ゾクゾクツ

(ヤバイ本氣で寒氣が)

「あ、わっわと離れやがれ幸樹ーー！」

「い、やーだー」

ドゴッ
ガスッ
グチャ

「ふ〜。やつと離れたか」

まあ一応紹介しておいた。わっわオレに抱き着いてきた迷惑窮まりないやつは、中学からずっと同じ組で所謂悪友つてやつだな。名前は富坂 幸樹 運動神経もそこそこ良いし、なにより見た目がめちゃくちゃイケメンだ。

(まあ頭は悪いけどな)

なので女子によくモテる。だがそれは普通にしてればの話しだ。周りもこいつの異常を知ってるから告るなんてしないだろうがな。

ガラツ

「ほりあー席に着けーHR始めるぞー」

当然のように担任も幸樹を無視。いつそ清々しいくらいだ。因みにこの2・3の担任はオレと幸樹の一年の時の担任もある。だからこそ幸樹を気にしないんだがそれはそれでどうかとも思つ。

「ああ、出席となるの面倒だからお前ら体育館にすぐ行け」

おいおい適當だな。とか考へながらオレも他の奴に続いて始業式に出るため体育館へ向かつた。一人教室に置いてかれる幸樹

「みんな置いてかないでくれ〜」

半泣きになりながらも急いで後を追っていく。

第一話 悪友！？登場の日常（後書き）

美緒＝み 幸樹＝二 」「やつたぜ！…今年も美緒と一緒にだ〜〜〜！」 み「はいはい。これで5年連續だね。」「きっと俺達の愛し合ひの氣持ちが凄いからだな！…」
み「キシヨシ」 」「ちょっと、
それは酷くない！？」 み「全
然、だつて本当のことだし」
こ「す、少しごらりに否定してよ」
み「人間やつぱり嘘はいけないよね」
こ「うわあああん！…」 み「ああ泣
いちやつた。ま、ほつとこ。次回は…」
私の出番ね！…」
み「だ、誰！？」
？？「次話で判ることよ。では今回はこの辺でまた〜」

第三話 始業式の日常（繪書セ）

更新が遅れて申し訳ないです。なのでひょっと長めになりました。

第三話 始業式の日常

「なあ、なあ美~緒~」

「…………」

「美~緒~ちや~ん」

「…………」

「ぐひ、ぐすひ」

「わかつたから泣くなよ幸樹」

どうも、眞面目に始業式に参加してゐるのに幸樹に話しかけられうんざつしてゐる主人公の美緒です。

(何でここにはいつもこのなのだろうか)

少しほおとなしくとこづものが出来ないのだらうか

「で、何なんだ幸樹?」

「今日の始業式の最後に新しい理事長の紹介があるらしいぞ」

「へえ~。まあ、じつせ年寄りだな」

「それが違うんだって!...若い女人らしいんだ」

「ふうん」

「何だよ、興味ないのか？」

「まあオレにはあまり関係ないしな」

「面白くない反応だな～ 美緒ちゃんは」

「ちゃん付けは止める…。何度も言つたらわかつてくれるんだろうな
～。ねえ、こ～う・き君?」

『ハハハハハハハハ

(み、美緒の後ろに修羅が見える)

『生徒会長からの挨拶』と、司会をしている生徒会委員の人が言つた途端に周りの話しが無くなつた。美緒も殺氣を消しステージ上にある台へと意識を向けた。

(た、助かっただ～。美緒の奴マジで恐かっただぞ)

(そういえば、棗姉は新しい理事長のこと何か知つてるのかな?なんか嫌な感じが)

そんなことを一人が思つてゐる内に棗が壇上に上がつた。

(あ、みー君見つけ～。可愛いな～もう)

と、思つてゐる間も決まりきつた挨拶を述べ壇上を後にする。

『では、式を終了する前に新しい理事長の紹介と挨拶をお願いします。』

新しい理事長が壇上へと上がる。

「…？」

思わず自分の眼を疑ってしまう。信じられなかつた。
「なあ、あの人美緒のお母さんじや……」

何故、新しい理事長として来たのかわからないうが

(嫌な予感的中かあ)

と心中で呟いた。「あはよつゞやれこます。新しくこの鳳虎学園の理事長に成りました。倉持 麻那くらせまなです。じつぞよひしへ。」

棗姉を見ると何も聞いてなかつたようだ眼を丸くしている。

(棗姉も知らなかつたのか)

なら自分が知り得るわけがない。

生徒会長といふこともありいろんな情報を知っている。

それこそ、盗聴器でも仕掛てるのではないか?といふくらいだ。

理事長もとい母が壇上から降りる。

否、途中で止まつた。「あ、みーちゃんとなつちゃんはこれが終わつたら理事長室に来るよつて」「元気だよつて」

と、言つて理事長室へと帰つて行つた。

「はあ～」

溜息がでる。また厄介な。そいつ思つも式の後母に逆ひり詫こいかず
理事長室へと向かつ。

(頑張れオレー…)

自分を励まし、途中で姉妹と会合流し足速に進む。

第三話 始業式の日常（後書き）

美緒=み 粟=な 麻那=まみ「なんか母さんまで出て来て」の先
づつなるんだわ~」
な「安心しなさい所詮は理事長よ。そつねう出番なんてないわ」
ま「なつちちゃんたら酷いわ。おょよ
よ」
と黙りつぶやく
かしづ。わすが私のみーちゃんねーーお礼にちゅーしてあげる」
み「いらないから離れてよ」な
「やつよれりわと離れなさーーーいくらママでも許さないわよーーー」
ま「もひ、しようがないわねえ~」
み「はあ~。もう疲れたから今回は
この辺で、じゅまた」な「じゅまたねえー」
ま「それ
じゅまた~」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6233c/>

美緒の日常

2010年10月9日13時01分発行